

八達嶺、弥次喜多道中

六月二四日（木）。朝六時半に起きて、カメラとともに万里の長城に向けて出発。ちよつとした遠足気分だ。北京南站から北京站まで二〇路のバスで出て、北京站近くの食堂で朝食にラーメン。

列車は三二三次張客口行き快客列車で八・五〇発、青龍橋着は一一…一〇。都市部を離れると、すぐに列車は郊外の農村地帯へと入っていく。列車はもちろん指定座席なので、カメラは別の車両。おしゃべりをする相手もなく、ぼんやりと通り過ぎていく風景を眺めた。途中、服務員による改札があり、少し緊張したのだけれども、僕は運良く（？）外国人切符を買っていたので、もちろん問題は無い。

最後の停車駅を過ぎると、それから一時間ほどは切り立った山岳地帯の風景が続いた。ときおり険しい山の頂あたりに万里の長城らしき建築物が見え、これから間近にすることになる長城への期待をふくらませた。列車が青龍橋に近づくと、カメラが車両にやって来た。途中の改札のことを尋ねると、中国語もしゃべれないし、黙っていたら問題はなかったということだった。これまで何度か中国人に成りすまして列車の硬座を利用してきたけれども、もしもバレていたらと思うと、少しハラハラしたのだった。

青龍橋は山中の駅で、なにもない。中国一の観光地の駅として、このようなことでもいいのだろうか、と思うほどだ。道標に従って歩き始めると、ガード下に（軽トラックの荷台を客席にしたような簡易タクシー）を止めた男が、乗らないかと声をかけてきた。かなりしつこかったのだけれども、青龍橋駅を降りたときからほとんどピクニック気分の僕とカメラは迷わず歩いていくことにした。

本当にこの道でいいのだろうかと迷うような山道を歩いていくと、しばらくして舗装された広いバス道に出た。歩いていると、たまにミニバスや観光バスが僕らを追い越していく。駅から二〇分ほど歩いて城門に近づくと、ようやく他の観光客の姿や、観光バスの駐車場や、あるいは軽食や飲物の店が目につくようになり、ここが観光地であるということが実感できるのだった。僕らも少し浮き足だつように城門をくぐり、小さな城下町のようにお土産物屋や食堂などが軒を並べる一角を通り、八達嶺の入口前の広場に出たのだった。

入場門のあたりは中国人、外国人混じって、観光客で賑わっていた。售票処は入場門の隣にあり、外国人用と中国人用に分かれているが、中国人用に並んだことは言うまでもない。チケットは八元。チケットの購入は問題なかったのだけれども、カメラに続いていざ入場門を通り抜けようと

すると、若い服務員に制止されてしまった。

「おまえは何人だ？」というわけだ。さすがに中国一の観光地というわけで、外国人の見分けにも慣れているのだろうか。しかたなく外国人窓口でチケットを買いなおして入場した。外国人料金はFECで一五元なり。

八達嶺の長城は石とレンガで築かれたもので、中国の都市に見られる城壁のようにがっしりしている。高さは平均で七・八メートル、幅は六メートル前後、城壁の縁は二メートルの高さがあり、銃眼があげられている。また所々に二階建ての城楼が建てられていて、兵士の住居と見張り台を兼ねている。

入場門から左、つまり西の方へと長城の上を歩いていったのだけれども、石のスロープはけっこうきつくて、とてもしんどいのだ。いくども立ち止まり、休憩したり、写真を撮ったりしながら歩いていった。いくつかの城楼を越えて歩いていったのだけれども、行けども行けども、果てしないのだ。長城はるか西方まで山々の峰を伝うようにうねうねとどこまでも続いている。はるかに数千キロメートル先まで、ゴビ砂漠の嘉峪関まで。僕はふと、敦煌から蘭州へのバスの途中で目にした嘉峪関の砦を思い出した。そしてそのはるかな距離に目のくらむような思いをしたのだ。とは言ってもこの八達嶺の長城は明代に造られた長城をモデル化したもので、それより古い時代のものは単に土を突き固めた版土でできた土の壁のようなもので、八達嶺のもののように立派なものではないということだけれども。

どこまで行ってもきりがなく、腹も減ってきたので、いったん退場し、広場脇の食堂で昼食にした。観光地らしくちゃんとした食堂もあるのだけれども、発泡スチロールの弁当にちよつとしたおかずを注文してつきあった。食後は缶のコカコーラ。三・五元なり。広場の片隅の木陰で、実に久しぶりのコカコーラを飲みながら休憩。ふと見ると、同じ売店で同じコカコーラを買って、外国人(白人)がFECでの支払いを要求されて、腹を立てて缶を突き返していた。まるで服務員のような売店の店員の態度に、思わず白人の観光客に同情する。

食後は、長城の上からも目についていたロープウェーに乗ってみようかということになった。乗り場はバス道を北の方に歩き、長城をくぐり抜けてしばらく行ったところにある。ロープウェーのロープの行き先が見えなくて分からないのは心配だったけれども、おそらく長城の上のどこかに行くのだろうと考えた。

ロープウェーの乗り場には人気がなく、がらんとしていた。料金は中国人が片道二〇元、外国人は五五元(FEC)だった。人気がないのは、広

場の方から入ればすぐに長城に登れるものをわざわざ高い料金を払ってロープウェイに乗りたいと思う者は少ないからだろう。

乗り場脇の售票処でチケットを買う。つもりが、カメラの方はすんなりと中国人で通ったのに、または僕だけ見破られてしまった。「何人か？」と聞かれると「日本人」と答えないわけにはいかないのだ。僕が日本人だと分かると、心配して入口を入ったところで待っていたカメラの方もあやしいと思ったのか、服務員の追及がそちらの方へ行きそうだったので、「彼は中国人だ。僕らは友達で一緒に遊びに来た」

と言って追及をかわしながら、カメラにはひとりでロープウェイに乗るようにと促した。五五元の外国人料金を払ってまでロープウェイに乗るつもりはなかったたので、僕はもう一度広場まで戻って長城に再入場するつもりだった。ロープウェイの行き先は分からなかったけれども、本道のようなものだから、たぶん長城の上で会えるだろうと思った。

しかしどう考えても腹の虫がおさまらないので、窓口の服務員とちよつとした口論をってしまった。

「同じ物に二重の価格があるのはおかしい。こいつには高く、あの人には安くでは、信用がなくなるではないか。日本の観光地では、君たち中国人も、日本人も料金は同じだ。外からやって来た部外者からふんだくるなどという発想をする中国はサイテーではないか。むしろ客人はもてなすというのが由緒正しい道というものではないのか」

と僕は乏しい語彙を駆使してまくし立てたのだ。

服務員はまあそれもそうだけど、と笑いながら、

「日本では啤酒は一本いくらだ」

と痛いところをついてきた。

「：一〇元くらいかな」

「中国では二元程度だ。ということはこのロープウェイの代金は中国人は二〇元だから啤酒一〇本分くらい。日本人は五五元だから啤酒五本分くらい。日本人の方が安いくらいではないか」

と、半分くらいは僕の創作だけれども、そのような意味のことを服務員は言うのだった。

僕はあっさり言い負かされてしまった。そう言えば累進課税だって金持ちからたくさんお金を巻き上げるとのことかな、と。いやしかし、外国人という区分では、貧乏人の日本人や中国よりも貧乏な国の人はいたいどうなるのか、とか、いやそんなに貧乏な人ならばそもそも外国旅行などできないか、とか、あれやこれや考えながら、それでもどうにも納得できないまま広場に戻ったのだった。

長城への再入場では、仕方なく外国人窓口でチケットを買った。ロープ

ウエーの服務員の論理に納得したからというわけではなく、二度も日本人だと見破られてしまったので、再挑戦するという気も起こらなかったのだ。

午前中に入場門から西の方へ歩いたので、今度は東の方へと歩いていった。しばらくはゆるやかな坂だけでも、しばらく行くととても急に足もとに気をつけないと滑ってしまいそうなほどだ。ある程度の所まで行って、逆戻りした。午前中よりも観光客は増えたようで、日本人の団体客もいて、あちこちに日本語が飛び交っていた。その日本語に気が休まるような、ねちつとした語感が嫌なような変な感じがした。また、同じ場所を旅行しているのに、彼らと僕とは異なる次元にいるような、とても遠いような感じもしたのだった。

長城を行ったり来たりしたけれども、カメラはいなかった。ロープウェーの行き先さえ分からない。もしかしたら長城に登るロープウェーではなかったのかもしれない、という疑問さえわいてくる。仕方がないので、とりあえず出口の広場で待つことにした。

午後三時半頃。しばらく広場で待っていたのだけれども、カメラと落ち合うことはあきらめて、青龍橋駅の方へと行くことにした。というのも、きちんと時刻表を調べたわけではないし、二人で打ち合わせたわけでもないのだけれども、午後四時過ぎの列車が最後だったからだ。青龍橋のあたりはスイッチバック式になっていて、青龍橋駅というのは実は二つあり、帰りはもしかしたら違う方の駅にいかなければならぬかもしれない、とカメラが言っていたような気もするのだけれども、とりあえず到着した駅の方へ行ってみることにした。それに、もしかしたらカメラは先に駅の方に行ったのかもしれない、とも思う。

ちよつと焦りながらバス道を歩き、細い山道を伝って、ようやく青龍橋に到着。と思つたら、折しも中国人の二人連れが駅から出てきたところで、駅に向かう僕を見つけると声をかけてきた。

「火車、没有！」

彼らも列車に乗るために来て、ないことが分かつたらしかなかった。やはりカメラがちよつと言っていたように、もうひとつの駅の方へ行かなければならないのか。それにしてもそのもうひとつの駅というのがいったいどこにあるのか分からないし、これから捜していたのでは時間も間にあわない。

呆然として立ちつくしていると、二人連れの中国人が、一緒にバスで帰ろう、と誘ってくれた。どのようにして北京まで戻ったらいいのか見当もつかなかつたので、ありがたく誘いに乗ったのだった。

再び三人で山道を歩き、バス道を長城の方に向かって歩いた。長城の入

口近くで、たまたまやって来た公共バス（五元）に乗り込み、ようやくひと息。とともにもしも二人と出あわなかつたら、と思うとちよつと背筋が寒くなった。青龍橋駅のベンチで丸くなって眠る自分の姿が頭を過ぎったのだ。それにしてもカメラはいつたいどうしたのだろう。ロープウェイの乗り場で別れるとききちんと落ち合う場所を決めたわけではないから、ひとりで帰っているといいけれども。

バスは一時間半ほどで北京の長途汽车站らしき場所に到着した。乗客たちとともにバスを降り、二人連れにも軽く挨拶をして別れた。

「さて…と、ここはいつたいどこだろう」

見知らぬ場所に放り出されて、しばらく立ちつくしたけれども、ともかく北京の市街地に戻ってきたことは確かなので、なにも焦ることはない。北の長城から戻ってきたことを考えあわせて、地図と道路表示を見比べる。現在位置は旧内城北の徳勝門を旧外城近くまで北に上がった所、徳勝門外大街という通りであるということを得る。バスに乗って戻るときも考えられたけれども、せつかく見知らぬ場所にいるのだからと、徳勝門まで歩いて南下し、そこからしばらく西に行ったところにある積水潭駅から地下鉄に乗ることにした。

徳勝門外大街は商業地区というわけではなく、落ち着いたたたずまいを見せる通りで、僕はゆつくりと夕暮れの散歩気分歩いていった。途中の商店でアイスクリームを買い、それをなめながらと歩いて。二〇分ほどで徳勝門に到着。城壁はないけれども、立派な城門がそびえているので、徳勝門を眺めながら一服。そこからしばらく歩いて、積水潭駅から地下鉄に乗り、前門を経て、バスで招待所まで戻った。

招待所の部屋を覗くと、心配していたとおりカメラはまだ戻っていない。彼はまだ僕のことを捜しているのかもしれない、とふと思う。早々に見切りをつけてひとり北京に戻ったことで、少し心ががめた。

夕食は同室の日本人グループ三人で、招待所の南側にある庶民的な食堂へ。実はラサでの最終日にヤクホテルで同室になった大阪出身の二人のうちの一人がたまたま招待所にチェックインしてきたのだ。彼は以前に北京に来たときもこの招待所に泊まり、この近所にも詳しいのだ。夕食の食堂は彼の案内で練り出した。その後の足取りなどの話に花を咲かせ、楽しいひとときを過ごした。

カメラが部屋に戻ってきたのは午後一〇時近く。案の定、僕と落ちあえないまま見切りをつけることもできず、遅くなってしまったのだ。帰りの足はなくなってしまったので、団体観光のバスに乗せてもらったのだと言う。なにはともあれ、無事にカメラが戻ってきたことで、ようやく心の

つかえが取れて、僕は安心したのだった。